

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名

中田健太郎

『シュルレアリスム宣言』(1924)で、アンドレ・ブルトンが、シュルレアリスムを、「純粋な心的オートマティスム」と定義している。中田健太郎氏が提出した博士学位請求論文、「アンドレ・ブルトンにおけるオートマティスムの概念とその変遷」は、この「オートマティスム」(自動性、自動作用)という概念に焦点をあて、シュルレアリスム運動に至るまでのこの概念の歴史をたどった上で、アンドレ・ブルトンにおいて、またシュルレアリスム運動の中で、この概念が、いかに様々な意味をまとい、いかに多様な詩的、絵画的実践と結びついたかを、ほぼ時間軸に沿いながら記述したものである。

オートマティスムの問題を取り上げるにあたって、中田氏が最も注目するのは、詩作や芸術制作におけるオートマティスムの働きに関して、何らかの事前の意味の存在を前提とする考え方や、意味はオートマティスムの作用を通じて事後的に生成するとする考え方の両方が、ブルトンの中に認められるという点である。

前者の考えに従う場合、「意味」が由来する、様々な場所が想定されることに中田氏は着目する。そして、中田氏は、初期のブルトンが、オートマティスムを、作者が属する経験的世界の「外部」から届けられる「声」と関連づけて語った一方で、それとは正反対に、超自然的な「外部」を排除して、あくまで主体の内面にその由来を求めることもあった、という、その両義的姿勢を強調する。また、中田氏は、1930年代になると、この意味の由来する場所が、「巨大な貯蔵庫」としての、集合的欲望とも関連づけられていったことを指摘する。

事前の意味を想定するこの第一の考え方は、中田氏によれば、テキストや諸現象の「解釈」の問題と密接に関係する。そして、中田氏は、この第一の立場につらなる問題として、抑圧された潜在的意味の解釈としての精神分析や、フロイトが用いた自由連想の手法に言及する。また、『ナジャ』、『通底器』、『狂気的愛』の三部作の中で語られる、「客観的偶然」も、それが生じた時には全く気付かれなかったある現象の持つ「意味」が、未来において開示される、「事後的に成立する予言」としてとらえられる。

一方、第二の、オートマティスムにおける、意味の事後的生成、という考え方につらなる事象として、中田氏は、ブルトンのオートマティスムの源泉の一つとみなすことのできる、18世紀のデビッド・ハートリー以来の「観念連合」のメカニズムを挙げる。そこでは、デカルト以来の機械論の伝統に結びつく形で、事前の意味への遡行としてではなく、意識の不在に起因する機械的自動運動としての、オートマティスムの働きが見られることを中田氏は指摘する。中田氏は、こうした観念連合的オートマティスムを、事前に想定された観念からの生成ではない、「唯物論的」意味生成としてとらえる。そして、それを、『シュルレアリスム宣言』で言及される、ルヴェルディの「アポステリオリな」詩法や、アラゴンが実践した、「機械論的コラージュ」と、関連付けて語る。

こうした、オートマティズムの、「意味」をめぐる二つの考え方を、中田氏は、言語学者ローマン・ヤコブソンの二分法に従って、「隠喩的」なそれと、「換喩的」なそれと名付ける。アンドレ・ブルトンにおけるオートマティズムの中には、精神分析の自由連想法に由来する、「隠喩的な解釈可能性」と、心理学・精神医学に由来する、「換喩的な言語の増殖」のいずれも見られるというのが、中田氏の主張である。そして、中田氏は、こうした、隠喩と換喩の往還運動の中にこそ、アンドレ・ブルトンのオートマティズムの特徴があると考ええる。

本論文は序論と全五部からなる本論とから構成されている。

序論では、先行研究を、1980年代以降の研究、1970年代中盤以降の研究という二つに分けて詳細に示したあと、本論文が、1980年代以降の研究では「理論的フィクション」ととらえられることの多かった、オートマティズムそのものをあえて対象とすることの意義が述べられる。

第I部では、シュルレアリスム運動以前の「オートマティズム」の概念の変遷が、デカルトの機械論的身体論にまで遡って詳細に記述される。そして、既にこの概念が用いられるようになった当初から、後のブルトンのオートマティズムにつらなる、機械論的な傾向、生氣論・観念論的な傾向の両方が存在していたことが示される。この第I部ではまた、ピエール・ジャネに代表される精神医学とフロイトの精神分析という、オートマティズムの二つの源泉と、ブルトンのオートマティズムとの関係についても論じられる。

第II部では、ブルトンのテキストに、オートマティズムという語が初めて登場する、1920年代前半のテキストが取り上げられる。第一章で「霊媒の登場」というテキストに関して、ブルトンと「スピリティズム」(交霊術)との関係が論じられたあと(中田氏は、ブルトンのスピリティズムに対する姿勢は、否定しながらかつそれに惹かれてもいる、という両義的なものであると結論づけている)、二章では、ブルトンのコラージュに対する姿勢が、アラゴンのそれと比較される。ここでもまた中田氏は、ブルトンのコラージュに対する姿勢を、意識性と偶然性のいずれをも排除しない、両義的性格をもつものとしてとらえる。第三章では、「シュルレアリスム宣言」の一節が取り上げられ、意識的操作として時間性が介在するコラージュと、無意識的かつ瞬時的であるオートマティズムが一体となって、力動的な、エクリチュール・オートマティック(自動筆記)が生み出される可能性が述べられる。

第III部では、オートマティズムと絵画の関係が論じられる。『シュルレアリスムと絵画』のブルトンが、絵画におけるオートマティズムを、単なるシュルレアリスム的絵画の一方論と見なしていたことが指摘されたあと、その反面で、「内的なモデル」の表象という、『シュルレアリスムと絵画』の中心的主題が、オートマティズム的制作とつながりうるものであることが示される。この第III部ではまた、自動筆記的デッサン・絵画を徹底して実践したアンドレ・マッソン、自動筆記の等価物としてのフロッタージュの技法を駆使したマックス・エルンスト、ブルトンの客観的偶然にもつながる一連の「レディ・メイド」の作者である、マルセル・デュシャンについても言及される。

第IV部では、1930年代のシュルレアリスムにおける「オートマティズム」の変化が語られる。それは、まず、ダリの「批判的パラノイア」からの影響のもと、ブルトンにおける、受動的

オートマティスムから、能動的オートマティスムへの変化という形で表れたと中田氏は指摘する。具体的には、1930年の『処女懐胎』における、精神病者のテキストの偽装の試みが論じられる。中田氏はこの試みに関して、単なる精神病者の精神状態の再現や、その心理状態に達しようとする試みではなく、彼らの偽装を通じて、「言語がそもそももっている多様な自動性を、みずからの詩的手段として見出すこと」こそが問題だったとしている。

第V部では、1940年以降のシュルレアリスムにおけるオートマティスムの問題が取り上げられる。既に1939年の「シュルレアリスム絵画の最近の諸傾向」と題された文章で、ブルトンは、「絶対的オートマティスム」という語を用いている。中田氏は、この「絶対的オートマティスム」において、芸術制作と、疑似科学的言説が接近したことを指摘する。その具体的な例として、中田氏は、オスカル・ドミンゲスとエルネスト・サバトによる、「リトクロニック面」の概念とそれに従って制作された、ドミンゲスの作品『リトクロニックなエストカード』を挙げる。そして、この二人が主張したリトクロニスムが、時間という共通項を媒介として、ブルトンの「客観的偶然」の理論とも連続しうるものであることが示される。

最後に、この論文は、最晩年のブルトンが、自動記述の聞き取りを、「能動的かつ受動的」なものと考えていたことに言及して終わる。自動記述は、1940年代以降のブルトンのテキストにおいて、様々な他者の声を自らのテキストの内に取り込んでいく方法としてとらえられる。そして、中田氏は、ついにこうした、無数の声のこだまと化したオートマティスムのテキストが、同時にまた、ブルトン自身の声でもあったことを指摘する。「ブルトンはさまざまな声を反響させて予想外に大きくなった、自分の声を受け入れていたのではないか」というのが、中田氏の結論である。

本論文の特徴は、これら、極めて多様な、アンドレ・ブルトンにおける、オートマティスムの概念に、何らかの統一的な、一貫した理論を見るのではなく、むしろ、その多様性や時間的変遷それ自体の中に、オートマティスム理論の本質的性格を見出した点にある。中田氏は、こうした、時間とともに多様性を増していくオートマティスムのあり方を、「理論の固着への抵抗」ととらえ、そこに、一般のアヴァンギャルド運動に見られる、無時間的・抽象的な統一的理論の探究との大きな差異を見出した。中田氏が、ミシェル・ド・セルトーにならって、「理論の歴史化」と呼ぶ、こうしたオートマティスムの特徴は、本論文の中で、見事に示されているとあってよい。

審査委員会ではまた、本論文の、オートマティスム前史をめぐる記述について、高い評価がなされた。連合心理学の「観念連合」と、精神分析の「自由連想」という、二つのオートマティスムの源泉についての記述や、フランスへの精神分析の導入の経緯に関する記述などは、今後、研究者が参照すべき、貴重な資料になるであろうというのが、審査委員会の一致した意見であった。

しかし、本論文に対するいくつかの批判的意見も出された。以下、その主なものを列挙する。

- 1) 章ごとで、論述の密度にばらつきが見られる。特に、I、II部と比べて、III~V部の論述の力が弱い。
- 2) オートマティスム理論に関する記述に終始して、その詩的实践がほとんど取り上げられていない。

3) 50年代のオートマティズムの展開についてほとんど触れられていない。

以上に挙げたような、いくつかの批判的意見は出されたが、全体として、本論文が、シュルレアリスム研究に寄与するところの大きい、質の高い労作であることについては、審査員の意見が一致した。以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。